

日本カメラ博物館 JCII ライブラリー
学芸員 宮崎真二

なるさわれいせん
成澤玲川 (1877-1962) は、1906年に渡米し、オレゴン州・ポートランドで日本語新聞の発行に携わりながら写真技術を習得します。後に映画会社を設立して、ロサンゼルスやシアトルなどで日本人が活躍する姿を記録した作品を制作し、帰国後各地で公開しました。

1918年に東京朝日新聞社へ入り、1923年創刊の日刊『アサヒグラフ』の写真面を担当します。関東大震災による休刊後、週刊での再スタートにあわせて新設されたグラフ部長に就任し、続けて『日本写真年鑑』(1925年)、『アサヒカメラ』(1926年)などの創刊に携わりました。また、

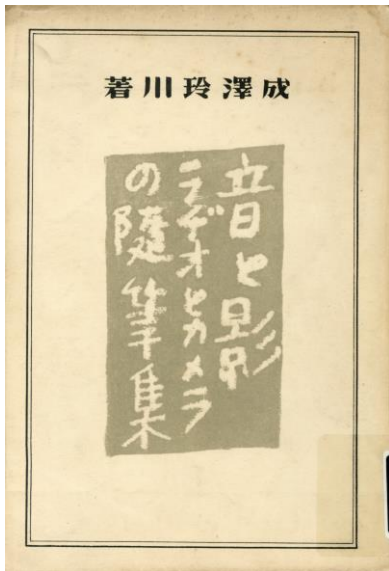
写真百年祭の開催、全関東・全日本写真連盟の結成、国際写真サロン創設など、当時最新のメディアであった写真の組織化に関する多くの事業を立案、運営しています。

1934年に日本放送協会(NHK)へ移り、1940年まで報道部長、調査部長をつとめました。戦後は6月1日を「写真の日」にする運動と日本写真協会の設立に携わり、副会長および専務理事として、日比谷図書館に「写真文庫」を寄贈する活動や『日本写真年報』の企画、編集などを行いました。

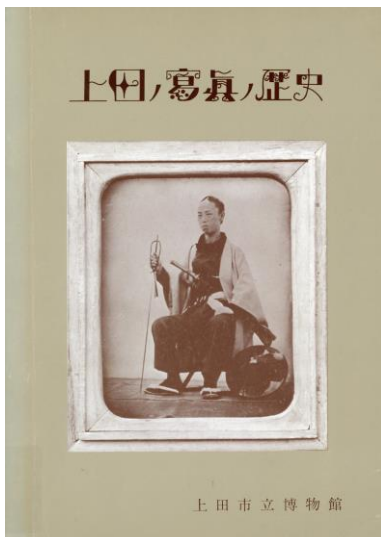
「アサヒカメラ叢書」の『新聞写真の理論と実際』(東京朝日新聞社・1934年)では、新聞写真の定義や構成要素、ニュース価値と速報性の関係など、理論面の解説を担当しています。

1940年には三省堂から『音と影 ラジオとカメラの随筆集』を上梓しました。本書は「音」を仕事としたNHK在職時代の所感などと、「影」を仕事とした朝日新聞在職時代の写真に関する記述をまとめたものです。「音」の方は時事的な話題として、ドイツを中心とした海外宣伝放送など「空中戦」の事例について書き下ろした「歐洲大戦とラジオ」を主体に、放送で使用する用語や話術などに関する話で構成しています。「影」の方は、『アサヒグラフ』と『アサヒカメラ』のなりたちについて記述した「大震災の焦土から 週刊アサヒグラフの誕生」や、写真と映画による国際親善や文化紹介についての話、幕末から明治にかけての写真に関する新聞記事や広告を抜粋した「明治時代の新聞に現はれた寫真関係の記事」などを掲載しています。

『アサヒカメラ』の創刊編集長であった成澤と、アマチュア向け写真雑誌の先駆となった『カメラ』の主筆をつとめた高桑勝雄は、ともに長野県上田の生まれです。上田市立博物館が1979年に発行した展示図録『上田の写真の歴史』では、同郷出身者として交流のあった写真家の柴崎高陽が、両氏の経歴と功績について詳しく記述しています。



『音と影』



『上田の写真の歴史』